
想いを守る為に

偽善者と書き道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いを守る為に

【Nコード】

N3651R

【作者名】

偽善者と書き道化

【あらすじ】

チート転生者及び憑依主人公嫌いの偽道が電波を受信して書いた作品です。

終わり方はノーマルエンドみたいな感じで、転生者を否定する様な文章が多々出てくるので、嫌いな方は読まないでください。

(前書き)

本当に読むのですか？

……分かりました。

色々が無茶な設定がありますが、突っ込みは無しの方向で…。

転生者：

数ある世界「二次創作」に現れては、正義の味方を気取る理不尽な力を持つ人物達。

しかし、彼らの救う対象は“原作キャラ”と呼ばれる選ばれた人物のみ。

では、選ばれなかった人間はどうすればいい……………。

「父さんと母さんが帰って来たら、一緒に遊園地に行こうな」

「うわぁ、本当？」

本当に遊園地に行けるの!？」

「本当よ。父さんと母さんは嘘をつかないわ」

「うん!」

「だから、ちゃんと待っててね」

「うん!…いつてらっしやい!…!」

おとーさん、おかーさん!!」

「「「いつてきます!」「」

僕はこの時、これが両親との最後の会話になるなんて思わなかった。

その日から三日後、

黒い服を着た男の人が僕の家を訪ねてきた。

「おにいさん誰？」

おとーさんとおかーさんのお友達？」

「っ!?!……ああ、ボクはクロノ・ハラオウンだ。

キミの両親に命を助けられた者だよ」

「おとーさんとおかーさんに救われた？」

「ああ、キミの両親は勇敢“だった”。

いや、ボクの職場の人間は、みんな勇敢“だった”」

当時の僕には、クロノさんの悲痛な表情の意味が理解出来なかった。

「え〜と、おにいさんはなんで泣きそうなの？」

おとこのこは泣いちゃダメだっておとーさんがいつてたよ?」

「ああ、ああ……そうだな…。
泣いてはダメだな…」

その一言一言が、クロノさんをどれだけ傷付けた事か…。

「ロウファ……キミの両親は……遠くに行って……しまったんだ……」
理解出来なかった。

「でも、やくそくしたよ？
帰ってきたら遊園地にいこうって…」

その言葉を最後にクロノさんは僕を抱き締めて

すまない　ボクのせいで　すまない

と何度も何度も謝ってきた。

それから十日後、アースラという船が……父さんと母さんの乗っていた船が、ある魔導師達の手によって墜ちた事を知った。

唯一の生存者、クロノさんによりもたらされた情報では、アースラを墜とした魔導師達の名は…

プレシア・テストロッサ

フェイト・テストロッサ

アリシア・テストロッサ

高町 なのは

八神 はやて

シグナム

ヴィータ

シャマル

ザフィーラ

天夢 龍二

彼女達は、管理局の正義を否定し、ロストロギアの力を使い死者蘇生……アリシア・テストロッサの復活の儀式を開始。

その際、ハラオウン執務官及び武装隊……父さん達が時の庭園に突入。

しかし、時の庭園に突入後、すぐアースラは撃墜され、指揮系統は混乱。

立て直す前に敵魔導師達の襲撃に合い、抵抗虚しく全滅。

しかし、敵方の魔導師達の中にも、彼女達の行いに疑惑を持つ人がいた。

ユーノ・スクライア

彼は、クロノさんや武装隊を自身の転移魔法陣に誘導し脱出を試みた。

結果、脱出出来たのはクロノさんとユーノさんだけだった。

父さん達はクロノさんを逃がす為に戦って死んでいったらしい。

ユーノさんが言うには、天夢 龍一と言う男が現れてから、みんなおかしくなったと言う事だ。

自分も最初は龍一と言う魔導師の言葉を全て肯定したが、クロノさんに対しての態度を見た後、不信に思い精神に干渉する魔法に対するプログラムを急遽作成し展開。

瞬間、彼に対する好意は全て消え失せたらしい。

この事から、管理局は天夢 龍二をSSS級次元犯罪者に認定した。

三年の時は流れ、僕はクロノさん率いる特別遊撃部隊に入隊した。

この部隊の裏の理由は天夢 龍二の抹殺。

しかし、天夢 龍二を殺す事に成功したとしても僕達の行いが世間にバレれば、トカゲの尻尾の様に切り捨てられる。

しかし、この部隊にいる人はそれを気にはしない。

この部隊の人間は皆、復讐者なのだから。

僕達の最初に憶えさせられた魔法は マインドプロテクト。

読んで字の如く精神防御の魔法。

敵は、常時、魅惑の魔法を展開しているゲス野郎だ。

そんな人間の屑と戦うには最低限必要なものだった。

僕達、特別遊撃部隊は最初は5000を越える魔導師の大隊だった。

しかし、特別遊撃部隊は、1人が死んで、2人が死んで…… 10人が1000人が1000人が…。

そして……

『ミッドチルダの皆さん、聞いてください』

時空管理局の滅ぶ日が来た。

ミッドチルダの人達は天夢 龍二達の甘い言葉に乗せられ、時空管理局に襲撃を掛けてきた。

市民を敵に回した時空管理局はスグに追い詰められて行った。

「逃げる小僧！

逃げて、アースラに向かい、このポイントに向かえ！！」

僕はレジアス中将に助けられ、あるポイントの座標を託された。

アースラに辿り着く迄にいろんな人達に襲われて、次々に仲間達は倒れていった。

それでも、なんとかアースラのドッグに辿り着き、発進させようとした時、モニターに映像が映る。

『久し振りだね、クロノくん』

「エイ……ミイ？

バカな！エイミイはあの時！！」

『忘れたかな？』

龍二さんのレアスキル』

「……………死者の…蘇生」

クロノさんの手に血が滲んでいた。

アースラの外を見ると、エイミーと呼ばれた女性が手を振っている。

『アースラは見逃しても良いんだけど……………クロノくんは駄目。出てきてくれないクロノくん。』

クロノくんを捕まえれば、龍二さんにご褒美貰えるんだ。』

「エイミー……………キミは……………」

クロノさんはモニターを切った後、S2Uに何らかのデータを組み込むと、僕の前に立つ。

「ロウファ、キミにこの杖を託す。

ここには、今まで共に戦って散った仲間達とボクの遺言が刻まれている。

時が来たら……………世界中に向けてボク達の想いを告げてくれ」

クロノさんはそれだけ言い、扉に手を掛ける。

「ユーノ、後の指揮は任せる」

「……………当然だよ。

じゃあね……………親友」

「ああ、さよならだ……親友」

クロノさんが外に出てアースラが飛び立った後、青い魔力光が輝き、アースラのあったドッグは凍りついた。

トップを喪った僕達は兎に角、レジアス中将の託されたデータを元にその座標に向かった。

その旅の途中、全回線に向けての報道があり、それを映す。

そこには、時空管理局が何れ程、卑怯で最悪の組織だったかを語る天夢 龍二の姿があった。

「みんな、目を逸らさないで。

アレが僕達の敵だよ」

ユ一ノさんの凜とした声が響く。

あの男が……僕達の敵。

僕達が目的地に着くと、2人の男が迎え入れてくれた。

「やあ、はじめましてかな。

私達の名は知っているね？」

スカルエツティ兄弟。

史上最高の頭脳を持つ、史上最悪の科学者との出会いだった。

最初こそ、彼等に警戒し、協力する事を拒む者達はいた。

……彼の言葉を聞くまでは。

「おや、ならば天夢　龍二の正体と誘惑の魔法解除のプログラムは要らないんだね？」

スカルエツティ兄弟が言うには、レジアス中將は誘惑魔法解除プログラムのために彼等に資金援助をしていたらしい。

レジアス中將の決断は間違いだと言いたいが……無駄にしたくなかった。

だからこそ……

「スカルエツティ……人工ではなく、天然の肉体を戦闘機人に改造したくないか？」

ユーノさんからの静止の言葉を聞かずに僕は自らの身体を実験体と

して差し出した。

六年後

僕は培養液から外に出された。

僕の戦闘機人化は成功……とはいえ、まともに稼働出来るのは一度だけ。

しかも、戦闘行動後は確実に死亡すると言ったものだった。

別に気にしない。

僕にはユートノさんのみたいに助けたい人がいなければ、他のみんなの様に待っている人もいない。

「さて、キミには話していなかったね……彼の……天夢 龍二の正体を……！」

天夢 龍二

神に望まれ、この世界をアニメとして見た事がある転生者。

僕は、スカルエツティ弟の次の言葉に絶句する事になる。

「彼の目的かい？」

それは、実にシンプルだよ。

世界の平和？

残念ながら、彼が居なくてもこの世界は平和になる。

世界の滅亡？

いやいや、そんな高尚なモノではない。

ついでに、世界征服とか人類抹殺とかでもない。

彼の目的は、余りにも身勝手に、呆れ果てそうなゲスな理由さ！！」

周りを見ればみんなが屈辱を受けたような表情をしていた。

「彼の目的は、ハーレムを作る事だよ！！」

言葉が出なかった。

ハーレムを作る？

たかが……たかがその程度の理由で……

レジアス中將が……

クロノさんが……

仲間達が……

名も知らぬ魔導師が……

父さんと母さんが……

「そんな……そんな馬鹿な理由で……みんなが？」

「ふむ、実はもう一つ。」

彼はバットエンドが嫌いらしい」

「バットエンドが嫌いだと！？」

こんなにも哀しみを造り出しておいて……！」

「そうだよ。彼は“原作キャラ”の救済にしか興味がないのだよ！

しかも、原作キャラでも気に入らない人物は……そう、クロノ・ハラウンのように消されるのだよ……！」

納得がいかなかった。

理解できなかった。

確かにこの世界で生きる僕達。

何故、ここまで優劣が勝手に決められる？

「まあ、かく言う私自身も転生者でね。

とは言え、原作キャラとか、ハーレムには興味はないよ。

私は、この世界の技術に触れられればいい」

「何でだ？

あなたの知識があれば何でも出来るだろ？」

「何でも？

いやいや、とんでもない！

確かにその場凌ぎは出来るだろう。

だが、そんな偽りの力にどんな価値があるのかね？

そもそも、人の人生を操って何が楽しいのかね？

彼等は、私達を神様を気取ったマッドサイエンティストと呼ぶが……私から言えば、あの男こそ神様を気取った愚か者にしか見えないね」

どっちもどっちだと思ったが……それでも、確かに優先して倒すべきはあの男だと思った。

そして……決戦の日

聖王のゆりかごは天に放たれ、ナンバーズ達は市街地へ。

そして…

僕達、特別遊撃部隊は…

「確認するよ。
僕達がこの戦いに勝つには、ナンバーズのみんが機動六課を抑えている間に無限書庫を確保、及び僕達の想いを市民に伝える必要がある」

ユ一ノさんの言葉にみんなが頷く。

「ロウファ率いる部隊は管制塔を制圧。
全世界にオープン回線で仲間達の遺言を読み上げて欲しい。
勿論、この回線は圏に近い。」

メインは僕の率いる少数の部隊。

無限書庫を制圧した後、僕は全力で全時空世界に魅惑魔法解除プロ
グラムを発動する方法を探す！

護衛は……ゼストさんにティータ！

みんな……死ぬなとは言えない……。

未来の為に死んでくれ！！」

「……………了解！……………」

僕達は必死の思いで戦った。

かつての同胞は魅惑魔法で操られていたりしていた。

いくら僕達の部隊は疲労が多かったが、最低魔導師ランクがBラン
クとかなり高いレベルだった為、目的地には何とか辿り着いた。

「クロノさん……貴方達の想いを伝える時が来ましたよ」

S2Uからプログラムを取りだし、全時空世界に向けて放つ。

『皆さん、聞いてください。』

僕は時空管理局、特別遊撃部隊所属、ロウファ・ハラオウンです！

『！』

告げたい想いがある。

伝えたい真実がある。

『六年前、貴方達の家族が、友が！
時空管理局で働いていた多くの人が亡くなりました』

外が騒がしい…。

『ロウファ！急いでくれ！！
機動六課のシグナムだ！！』

仲間の叫びが聞こえる。

『管理局員に手を下した方もいるでしょう。僕達を意味嫌った方もいるでしょう。』

……でも、聞いて欲しい。

彼は何が為に戦い、何が為に散ったのか。

思い出してください。

貴方達の知る彼等は、あの映像の様な残酷な行いをする人達だった
でしょうか？

……僕の言葉では何も伝えられないでしょう。

だから、今から彼等の遺言を流します』

それだけ言い、S2Uを置いていく。

「最後の舞台です。

頑張ってください……クロノ父さん」

扉を開け、外に出ると血の臭いが鼻を突く。

床に落ちていた一般魔導師用のデバイスを拾い、自分のデバイスもセツトアップしてゆつくりと階段を降りた。

「貴女が……シグナム」

「武器を捨てろ」

首を横にふる。

「それは出来ない。

だって、この先には守りたい“想い”がある。

例え、この手が赤黒く汚れていたとしても……散っていった人達の“想い”くらいは守れるはず!!」

「そっか……」

杖に魔力を込めて二本の剣を持つように構える。

「特別遊撃部隊、切り込み隊長……ロウファ・ハラウン！」

「機動六課、ライトニング小隊、ヴォルケンリッターの将、シグナム！」

「「参る!!」」

“ 想い ” を守る。

これが、僕の最後の任務。

ユーノさん……陽動は成功しましたよ……。

ユーノ 視点

あの戦いから五年が経った。

魅惑魔法解除プログラムは、あるロストロギアを扱う事で世界に放

つ事ができた。

正気に戻った人達は口ウファが流した散った仲間達の遺言を聞き、ある人は泣き崩れ、ある人は自らを罵倒し、ある人はお礼を言い続けた。

天夢 龍二だが、彼はゼストさんとティーダの手で殺された。

ティーダの妹さん……確かティアナちゃんがああ男の毒牙に掛かっていたみたいで、ああ時のティーダは本当に怖かった。

なのはやフェイト達だけど…

彼女達はその男と過ごした時間が長過ぎて、本当に魅惑魔法のせいなのか、或いは、本当に好きだったのか分からないらしい。

あつ、でも、ヴォルケンリッターの人達はスグに立ち直ったよ。

「む、スクライアか」

「シグナムさん？何故ここに……」

「勝ち逃げした男に花でも添えようと思ってな」

勝手だと思ったけど、ハラウン家のお墓とキミのお墓は地球の海鳴に作ったよ。

「シグナムさん。何故貴女がロウファに敗れたんですか？
ロウファは剣術なんて習っていなかったし……あの時は既に魔力も
殆ど底尽きていたのでしょう？」

「……背負った物と賭けた物。
何よりも、仲間の“想い”を守りたいと言う気持ちだろうな。
高町の家族も守る時に真価を発揮する剣術を使えるらしい」

想いの力……か。

「ところで、スクライア。
お前は何時になったら高町に想いを告げるんだ？」

「しっしっしっシグナムさん！？
ぼっぼっ僕達はそんなんじゃない！」

みんなで勝ち取った未来……。

僕達はこの世界で確かに生きている…。

(後書き)

どうでしたか？

えっ？つまらない？

……ごめんなさい。

今回の作品は、脳内で妄想した物でダイジェスト的に纏めた物です。

と言うか……クロノ死んじやった。

ハラオウン家は全滅ですね。

フェイトはまだ養子になってないし。

何故、最後はシグナムとロウファにしたかですか？

とらいあんぐるハート3の美由紀さんのセリフをパクりたかったからです！

あっ、すみません！

謝るんで石投げないで！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3651r/>

想いを守る為に

2011年3月6日14時44分発行